

回胴倒錯者

— PACHISLO FREAK —

客と私

ホールには様々なお客様が来店するので、中には当然マナーの悪い方も見かけることがある。掛け持ち遊技の常習犯や、台を殴る蹴るなど、その悪態は多種多様である。これらの行為は許される行為ではないので、即座に赴き注意を促す。もちろん個々の従業員がそれらの行為を発見次第、直ちに注意するのが理想である。しかし、それは理想に過ぎず、実際は見てもぬ振りをする従業員が非常に多い。理由は、「言いづらい」だけである。確かにその気持ちも分からないわけではないが、従業員なので注意することは仕事として当たり前のことである。なので、せめて一度だけでも注意してみてくれと、従業員たちに教育していた。

その日もインカムから「台に足を上げているお客様がいて、注意してもどけてくれない」などと言うものが聞こえてきた。現場に急行し、丁寧に断り足を下ろしてもらった。さらにK班長から「ボーナス確定の演出が出たのに当たらなかった、と言っているお客様がいて、私が何度説明しても納得してくれません」というインカムが入る。そのお客のところへ急ぎ、状況を聞くと共に説明を始める。

私「どうされました？」

客「ケンシロウが指をポキポキしたのに当たらなかった！」

私「小役の取りこぼしとかでは？」

客「ちゃんと狙ったから、それはないと

思う」

私「ではハズレですね。」

客「え？ハズレってあんの？」

私「小役の取りこぼしではなく、ボーナスでもない、と言うことはハズレですね」

客「ふーん……。じゃなくて、雑誌とかにはボーナスって書いてあった！」

私「ではその雑誌が間違っているんですよ、現実にはハズレが出たのですから」

客「……。」

私「どんな演出でも100%ボーナス確定なんてありませんよ。ボーナス絵柄が並んでこそ初めてボーナスです。」

お客との会話はたいいこんな感じ。実際この時代はこの演出関連のクレームは非常に多かった。特に「北斗の拳」。演出がガセったなどという話は、たくさん聞かされた。ケンシロウが巨大化したり、マミヤが空き街落したり、リンが遠くの方へ行ってしまった、これらは演出なのかバグなのか分かりません。きつとバグです、そしてバグであることは皆さんもご存知だと思います、ですから、どんな演出がガセってもおかしくないのです。リール上で7が並ぶまでは、ボーナス確定ではないのです。

毎日のようにホールに出ていると、そのうち常連の方々に話しかけられる機会が増えてくる。私が一般従業員ではなく、白いシャツを着ていたからかもしれない

が、その多くの質問は設定についてのものだった。今日は南国に6がないやら、どの台が6なのかやら、設定発表はないのかやら、当然それらの質問に答えるわけにはいかず、「わかりません」の一点張り。なかでもとても困る質問がある。「明日は○番台に座るから、高設定にしておいてくれよ」というものである。設定は私が決めているわけではないので、なんともいえませんよ、と返答しても、「とりあえず座るから」と返される。その日の夜に設定を入れるとき、どうしてもその台が気になり、真っ先にその台の設定を設定表にて確認する。見事高設定ならホッとするが低設定なら、次の日休みみたい気持ちになる。これも副主任の務めと割り切ってはいたが、嘘をつくと顔に出てしまう性格なので、正直、設定の質問はしないでほしい。誰もが気になる設定、お客はもちろん、従業員も私自身も気になる。それは出玉にかかわる最も大事なもののだから。なのでこの聖域は誰にも侵すことのできないものなのだ。

白いシャツを着るようになったときに店長に言われた言葉、「そのシャツでは、あまりお客と話をするな」そのように言われた意味が、このときに初めて理解できた気がした。その聖域を知る者として、それを知らない側に入り込むのは、それを作った者からも、それに入り込めなかった者からも、気分のいいものではないからだ。

設定術

初めて設定表を見たとき、そのときの感情としては「まあ、こんなものか」といった具合で、意外性もなければ、これといって目新しさもなかった。これが普通であり、店長の経験から来る最も正しい設定術に違いない、そう思った。しかし、このところホールには一時のような盛況ぶりはなく、稼動は徐々に下がってきていた。ホールの巡回、内勤業務をこなす私と、全くホールに出ず事務所にこもりっきりの店長、その実態をより把握しているのは紛れもなく私のほうである。客層や客質、人気や不人気、その台の特徴など、それらを加味すれば、もっと考えようがあるのではないだろうか？設定表に書かれた乱雑な5や6という数字、そのあり方に疑問が浮かびだしたのは設定の実態を

知るようになってから3ヶ月ほどが経過した落葉の季節であった。

「おいA、明日はどんなイベントだ？」

「明日は○○というイベントなので、456多数使ってください」

閉店が近づくと必ず行われる店長との会話である。そのイベント内容に沿って、設定配分をきめるからだ。閉店後に設定表を預かりに店長の下を訪れる。それに通り目を通すと、

「どうだ、なかなかいい感じだろ？」
「確かにかなりの数の456ではあります、南国には4ばかりで6は入れないんですか？」

「南国は4でもよく出るんだろ？半分の4にしているんだ、誰も文句は言わないんじゃないのか？それに6はすぐにバレちゃうだろ」

「6はすぐにバレますよ。だからいいんじゃないですか。4を3台減らしてでも、1台は6を使うほうがいいかと思えます。6が存在するという事実をアピールするのに絶対の機種だと思えます。」

私がこういうと、店長は明らかに機嫌を損ね、何も言わずに、また設定配分を直すこともせずに、足早に事務所を出て行った。長年培ってきた設定術、それを否定するかのよう私の意見が許せなかったのだと思う。しかし時代にに応じて、設定術も変化していかなければいけない。過去の4号機はこれといって設定の判別要素も少なく、また出玉もおとなしいものだった。この時代は6だけが別格というものが多。それらを考慮したうえで新

記憶と実感

ホールには様々な営業形態があります。換金率、イベント内容、導入機種、従業員の制服など、ホールによつてかなり異なっています。これらは、集客のための二つの方法であり、各ホールの個性でもあります。しかし、ユーザーは各ホールのイベント内容や、従業員の制服をいくつ覚えていでしょうか？いつも決まった店に行くような方なら覚えていいるに違いありませんが、そうでないユーザーはそれほど覚えていないと思います。

そんな中で、必ず覚えていいるものがあります。それは出玉です。大勝したホールは必ず覚えていいます。スロットに詳しいユーザーなら、設定6を実感したホールも覚えていいると思えます。

ホールの個性には、設定配分にも表れます。設定1から6まで満遍なく使うホール、中間設定の3、4ばかりを使うホール、また設定1か6のように極端な設定差を好むホール。はたしてユーザーの期待している設定配分はどんな感じなのでしょう？それぞれいろいろな意見があると思いますが、中間設定のホールは「番人気が無い」思います。どんな設定配分のホールでも勝つときもあれば、負けると

変えるわけにもいかず、南国に6を入れることはなかったのである。

「南国に6が入ってないじゃないか、入れとけよお前、ひどいヤツだなあ」

次の日に店長と顔を合わせた瞬間、店長は私にこう罵ってきたのであった。

きもあります。しかしその配分によって印象がかなり違ってくるのです。機種によつては、小役確率や、RT中のハズレ確率などから、大まかな設定の推測に繋がるものが多くあります。

それなりに良さそうな設定だが、6ではなさそうだと、ボーナス確率は6を上回るが、小役云々が中間設定並みだ。小役云々が6で間違いないので、もう少し粘って見よう。ボーナス確率もその他の確率も6に間違いのない、など、いずれも皆さんが1度は実感したことのある感情だと思えます。これは6を意識したものであり、6を判断できる要素の詰まった機種だからこそ実感できる感情だと思えます。そして最終的に「6を実感して勝てたのか」「6ではなさそうだったが勝てたのか」そこに差が生まれます。もちろん前者の方が記憶は深く残ります。あそここのホールは6を使っている。分がかりやすい機種なのに6が入っている。

本文でも記載した内容とかがるものがあります。そこに6がある実感というものはとても大切なような気がしてなりません。

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。